

縮妙法華經並開結

第一種 紙裝 正價金貳拾錢 郵稅金四錢
第二種 布裝 天金 正價金拾五錢 郵稅金六錢
第三種 皮裝 三方金 正價金八拾錢 郵稅金六錢

法華經は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實歸、思想統一の最高指針なり、現代思想界の紛亂其極に達し、結歸する處を知らざるに當りては、須らく法華經の研鑽を獎勵せざるべからず、然るに世流布の經典其類多しと雖ども、或は其價貴く、或は携帯に不便に、或は文字細微に過ぐる等、求道の士をして満足せしむるものなし、仍つて本會は此等の不利不便を除き、菊半裁判として携帯を便にし且其價を廉にし以て汎く一般に供給し本經の普及を圖らんとし茲に之を出版す、希くは諸士本會の趣旨を贊助せられ本書の普及に御助力あらんことを

東京市淺草區北清島町統一團内

發行者

法華經普及會

東京市淺草區北清島町十四番地

發行所

統一團

振替口座東京一二一九番

信仰なき生活は危険也

今の時代に人間を捕へて物理学の法則に當て箱めて見やうとするものあらば甚だ愚也、吾人の肉体の運動及態度を、人格的意義生命より引き離して見んとするものあらば、それは餘りに考へざるの仕業也、祈禱及懺悔を宗教的意義より分離し來りて、單に音聲や態度を叙述せんとするは甚だ不合理なる沙汰と云ふべし、吾人の生活は身心の交通より成立するもの也、人間生活の始は身心交通の始にして、生活の終は身心交通の終なり、交通の始は誕生にして、交通の終は死也、交通の繼續する間は即ち生活なり、誕生は生活の始なりと雖も心靈生活の始めにあらず、死は生活の終なりと雖も心靈生活の終焉にあらず、吾人の肉体上の動作は身心一如し來りて人格的意義を具ふ、實に吾人の眞價は

心靈的生命との關係に依つて定まるものなるは自明の理也、吾人一切の行爲は、心靈實在の生命と連鎖を保ちて結果を生み出さるゝにあらずや、而して其結果は自己の現在と未來に繋がり、亦永久に廣き世界に顯はるゝもの也、這は進化論よりも文明歴史の事實上よりも證明し得らるゝ所なりとす、然るに經驗科學の基礎より未來の自己を否定し去らんとするは、蓋し唯物論者の識の足らざる所なりと謂ふべし、人間自身は五官的目前主義に止まるものにあらず、人間の個性には無限性を含む、此世界は人間の生活は人類歴史の大戯曲の演ぜらるゝ舞臺にして、其意識界は不滅の實在格を認めずんばあらず、此不滅の實在格を認むる所に信仰を成立せしめ、信仰的世界を顯はす也、現在を充足し

て更に未來觀念に進む、斯の如く永久不滅の意義を含める活動は、定まれる目的結果を有して常に現在が未來の起點とはなる也、されば現在のこの生活は徒勞無益のものにあらず、永久的責任と深き關係を有するなり、故に個性的にして同時に團體的なるべからず、個人の行動はやがて社會の進運に參加すると同時に、其永久的大理想に向つて意義を有するものなりとす、生活の目的は現世の自己と人類の歴史に局限せらるゝものにあらず、盡未來際に貫いて實在の大人格に接觸すべきもの、こゝに於てか生活上には信仰を必須要件とは爲す也、心靈的生命が大事なりと主張する所以こゝに存する也、信仰とは不滅の實在格に對して自己の精神を擡げて南無し渴仰するもの、之を自己を否定するものと謂ふは誤り也、吾人の信仰の熱火燃ゆると大人格の大精神と同化し、我慢偏執の小我は消え去りて渾然として生活上の力をにぎる、日蓮上人の精神状態即ち其れ也、日蓮上人の悦びの生活を窺はゞ只偏に釋迦如來の御神、我身に入りかわせ給ひける

にや、我身ながらも悦び身にあさる
と宜へ、上人靈威の力は實在の本佛に靈應一如し、この悲惨なる現實生活に満足と歡喜に充ちたりし也、是豈に上人の實生活のみに止まるべきものにあらず、信仰に活けるもの、悉く然る也、上人更に云く、

されば國土いたくみだれば我身はいうにかひなき凡夫なれども、御經を持ちまいらせ候分齋は、當世には日本第一の大人なりと申すなり。

斯くの如く個性の立脚を内省して法華色讀の妙觀に努めんか、小人根性の安雲は拂はれて自から大人の襟度を具ふるに到る、信仰は力也、活信仰は艱難に處して怖れず事に當て撓ゆむものにあらず、萬難を排して猛進するの氣宇を存し、現在及將來の運命を支配して活動の生面を無限に開拓するもの也、信仰を缺ける生活は充全せる生活の意義を爲さず、信仰を無みして人生を送らんとするものは餘りに無謀也、信仰を無みせる生活は無意義也、無意義の生活は甚だ以て危険也、あゝ信仰なき生活は眞に危険なる哉。(白碧)



日本の御國體と佛教

大僧正 本 多 日 生

日本の御國體が萬邦に卓越して居ると云ふ意味は、之を分類致しますれば數へ切れぬ程のものであらうと思ひますが、併し特に注意すべき事柄は、此の御皇室の尊嚴に居らせらるゝこととありませう、皇統一系と申しますか天壤無窮と申しますか、實に其貴い意義を持つて神代から今日に至り、今日より千代八千代に傳はつて行く所の此意味合と云ふものは、日本御國體の中心點であります、さうして其御皇室には無限の靈徳が合して居る、此意味合が日本國民が御國體を敬讃するに就ては第一に心得置くべきことだと思ひます、第二には昔から傳はつて居る所の日本の道、惟神の道と申しますか敷島と道と申しますか名前は色々あります

けれども、日本建國當時より傳はつて居る所の我國の理想であります、我が國家の理想であります、其國家の理想之を道と云ふも教と云ふもそれは色々な意味に言得られるのでありまして、さう云ふことは私は大して拘泥を致しませぬ、敷島の道と申しても惟神の靈教と申しても一向差支がないと思ひます、兎にも角にもそれは何如なるものであるかと云ふと、非常に簡單に見えるけれども深い意味があつて、有ゆる思想文明を包容する所の道である、鏡の如しと云ふこともありましたが如何なるものでも映ず、其所が惡い其所が善いと云ふことは一々指摘せぬけれども、其者自身が顔に墨が附いた居れを是は行かぬと云ふことで、鏡が墨を

拭けとは言はぬけれども自から之を拭く、又白粉を付
け紅を付け美しく装つて鏡に向へば、鏡は別嬪になり
ましたなとは言はない、言はぬけれども自分は之なら
何所へ出ても恥かしくなからうと思ふ、斯う云ふ風に
鏡と云ふものは干渉をしないけれども各々其ものをし
て反省せしめ發奮せしむる所がある、善きものは
益々發展し悪しきものはいつとはなしに屏塞しなければ
ならぬと云ふやうなことがある、即ち言葉を変へて
言へば威靈と云ふものがある、其所が一方から言へば
森嚴犯すべからざるものであるし、又一方から言へば
包容の襟度の大なるものである、斯う云ふことに依
立つて居るものが惟神の道であらうと思ひます、其こ
とを考へて置かなければならぬ、唯日本の建國のこと
が大切であるからして、夷狄から渡つて來た所の教は
行けない、支那の文明は行けない、印度の文明は行け
ない、西洋の文明は行けないと云ふやうな狹隘な觀念
を取りまして、さうして唯古い自分のことだけに依
て教を立てやう文明を築かうと云ふやうなことになりま

したならば、是はもう其道に背くのみならず、非常に
國是を誤る所の思想であります、第三に考へて置かな
ければならぬことは教神の觀念であります、日本の御
皇室の淵源する所の神様が居らせられる、是も色々の
側に問題が起りますけれども、さう澤山の神様のこと
は拘泥する必要がありません、別段に宗教學上から或
は天然崇拜だとか或は鬼神崇拜だとか色々なことを言
つて建國の事情に於て批評する人がありますけれども
も、何も是は宗教として日本建國の事を彼れ申す必
要はない、道徳上から見ても日本の人間である以上は
此教神の觀念を養はなければならぬ、而して根底に於
ては宗教的意義と一致して仕舞ふものである、多くの
學者は倫理宗教と全然引離して居るけれども、倫理
の根底に這入り、或は倫理が實行の熱誠を持つて行く
時に於ては、其熱の頂點と其發現の源に於ては全然宗
教性を帯びて居るものである、我國の神様を信じな
ければならぬ教はなければならぬと云ふ其出發點は宗教
の教度の念と言ひますか、信仰と云ふものと同じ色彩

が籠つて居る、敬する時分には默禱致しますか或は手
を拍ちますか、兎にも角にも此有難いと云ふ觀念は普
通謂ふ倫理の上に於ても國の本を忘れてはならぬ、皇
祖皇宗を大切にしなければならぬ、至誠を以て神を敬
すると云ふことに這入つて行かなければならぬのであ
る、是は日本國民の宗教の如何に拘らず何れも從はな
ければならぬことである、之を明白に申せば我國の敬
神の意義は道徳的であり、さうして其所に宗教の意義
を含んで、此道徳が宗教と一致して居る所まで進んで
居るものである、併ながらそれが宗教信仰の全部でな
い、宗教信仰の全部となれば神様に依て自分の病氣を
治して貰ふとか、自分の煩悶を除いて貰ふとか、死ん
だら淨土へ連れて行つて貰ふとか、色々の宗教的要求
と云ふものを其神様へ持つて行つて御願ひしなければ
ならぬ、又するに就て思召はどうある斯うあると云ふ
ので澤山の教養と云ふものを要して來るのである、け
れども日本の神様を宗教に引入れて成功したものは今
日まで我國に於ては一つも無い、近い所には教會的

道が起つてやつて居るけれども、諸君が御考へになつ
ても分るが是等は多く迷信化して居るものである、其
教會の名を擧げると其所に厭味が起りますから申しま
せぬけれども、何々教會など云ふものを考へると、
今日の文明から見ても健全なる常識から判斷しても、
あゝ云ふ信仰は行けないと云ふことになつて居る、も
う少し前へ遡つて復古神道を唱へた平田先生あたりの
所でも、何か日本の神様で一切の願望を説明しやう、
宗教の意義を説明しやうと思ふから、聖賢の道を敵と
し佛教を敵とし西洋の文明も敵としなければならぬ、
平田先生の固陋の頑々乎たる思想と云ふものが此所に
現はれて來る、一面に建國のことに就て發揮せられる
點は貴いが、其爲めにさう云ふ弊害を生んで來る、又
其前に開齋先生の垂加神道と云ふものがある、是は全く
宗教的の軌道に依てやつて居られた、何所が悪いと
云ふやうなこともないけれども宗教の意義から見て、
今日進歩したる所の宗教、自由競争の中へ持つて來る
と云ふと、垂加神道などでは逆も今日の宗教界の中に

於て神道の貴き意義を發揚するなど云ふことは思ひも寄らぬことである、さう考へなければならぬ、最負の引倒しと云ふことが世の中にあるから、餘りやると色々な宗教の問題から煩ひが起つて来て、却て我が御國體に累を及ぼすやうなことがありはせぬか、そこでどうしても道徳的であつて、其意義が今の道徳に止らずして宗教の信念と一致する所まで進んで居らねばならぬ、宗教的色彩を帯びて居るけれども宗教信仰の全部にあらざると云ふやうな所を少しく工風を付けて、餘程含義的な意味を以て説明をし置かなければならぬと思ふのである、私の考、だけれどもどうもそれが本當のやうに信ぜられる、そこで此三點、即ち御皇室の尊嚴なること、推神の靈教の包容性であること、敬神の本義の倫理的であつて宗教的色彩を帯びて居る事柄等を能く考へて、其意味を意識して其所に精神を置くのが國民の國體觀念の中に於て大切なるのである、此皇室の尊嚴を益々翼賛して行かなければならぬ、推護して行かなければならぬ、此推神の包容性を益

も天下の同情を惹くことは出来ない、姑同志寄合へば融が合ふか知らぬけれども、虚心恒懷に考へれば嫁の方が善くて姑が悪いと云ふことも澤山ある、言はぬでも宜いやうなことを前提にして國體である國風であると云ふて、思想を壓迫するやうなことになつたら容易ならぬことだ、どうしても許すことの出来ない、御國體の意義を傷けるものは如何なる宗教、哲學、文學と雖も之を羈束しなければならぬけれども、其代りに其所は成べく包容的に、成べく吟味せられたるものでなければならぬ、惡るい事や狹い量見を前提として置てはならぬと云ふ事が非常な大事な問題である、そこで私は不束なる考ではあるけれども先づ此三點を思想の上に於て推護して行くと云ふことから、有ゆる學問宗教の思想を見なければなるまいと思ふのであります、其所に佛教はどう云ふ關係を示して來るか申しますると、御國體の尊嚴を維持することの爲には佛教は非常に盡したものであります、往々志は御國體の尊嚴を推護せんとして其結果が却て御國體に累を及ぼ

益瀾大にして世界の文明を吸收して仕舞はなければならぬ、此敬神の本義を何所までも維持して、如何なる宗教や學問や理窟が來ても、之に對する國民の道徳心は宗教の意義にまで這入つて居て動かぬ點を持つて居らねばならぬ、之に觸るゝ宗教、之に觸るゝ學問、之に觸るゝ理窟は許さぬと云ふ信念を持つて居るのが、國民の國體に對する考と云ふものである、私はさう信ずる、さうすると此三つのものに對して佛教はどう云ふ位置に立つかと云ふとを考へなければならぬ、我が御國體と佛教はどう云ふ關係があるか、佛教は此御國體を傷けるものであるか、少くとも此御國體の觀念を薄らがしむるものであるか、否然らずして佛教は此御國體の觀念を益々培養し、此意義を翼賛し奉つて行くものであるかと云ふとを考へなければならぬ、御國體と云ふ觀念を粗末なもの偏つたものに置いて、言はぬても宜い宗教のことを捏造して、他の宗教と衝突するやうなことを前提して、性の悪い姑が仕様のないことをブツ／＼極込んで善良な嫁を虐めるやうなことをして

したと云ふやうなとがないてはありませぬけれども、併ながら其動機と云ふものを考へて見ると云ふと、決して御國體をば傷けやうと考へてした仕事でない、最も極端のものを擧げて見ますれば、法然上人が一向専念の宗旨を立て、日本の神様も敬ふに及ばぬと云ふやうな宗旨を立てた、即ち一向宗であるから唯只管に南無阿彌陀佛と言ふ爲に、他に尊敬を拂ふべきことを許さぬと云ふ一方向きの主義を主張した爲に、それを承けたる弟子、信者の中には益々其方に馳せて遂には神明を侮蔑するに至り、爲に法然は所罰をせられることに相成つて處刑せられ、撰擇集は大講堂の前に於て焼拂はれ彼の墓は發かれて加茂川に屍骨を曝され、親鸞上人も越後に流されるやうなことになる、其果は永く後世に及ぼし漸く蓮如上人に至つて神明を輕んずべからずと云ふやうな譯で、六箇條と云ふものゝ第一に神明を輕んずべからずと云ふことを言つてある、元とから輕んじて居ないならば輕んずべからずなんて書く譯はない、佛像堂塔を輕んずべからず、阿彌陀様より外

のものには皆輕蔑すると言ふことになつて來たから連如上人の時に之を戒しめたものであるが、是れ元來は日本の敬神の本義を忘れて居る所の思想である、それを佛敎に捉はるゝが爲に日本の建國の意義を忘れ御國の大切なる意義を忘れて居る所のものである、けれども是れ逆も何も御國の尊嚴を傷けやうと思つて掛つたんではない、彼は眞面目に佛敎を研究して、さうして佛敎の教義のむづかしい所から、どうしても是は何か易いものでなくてはならぬと色々苦心して居る時に惠心僧都の往生集を見、従つて阿彌陀經を讀んで見ると、如何なる罪惡な者でも阿彌陀様を念じさへすればそれで救はれる、是が最も適當したもののぢやと思つて悦んで、此道に依つて人を救はなければならぬと云ふ自分の信念と慈愛の精神が凝つて、何等私の精神が無くして其所へ突進して行つたものである、決して御國を傷けやうと云ふ考は無かつた、けれども考が足らざるが爲に遂にさう云ふ結果になつた、無論原因よりは結果と云ふことから其罪を判斷するのだから、結

果が悪ければ無罪と云ふ譯には行かないけれども、併し情狀を酌量するとは適當なことである、併ながら是は遣り損うた、其ことから再び遣り損ひをする者が無いやうにしなければならぬと云ふことは明白に頭に置かなければならぬ、一方に御國を敬讃して参る方から考へると、中々熱心な御國の翼賛者があるのであります、同じ佛敎徒でも鷲と烏ほど違ふのでありますけれども、併し佛敎は廣いものですからさう云ふ色々なものが現はれて來るので、一方には御承知の日蓮上人が御國に對する信念主張と云ふものはどうであつたかと考へますと、我が御國を翼賛して居るのは無論のことである、翼賛と云ふだけで言盡せぬものである、日蓮上人は御國の隠れて居つた意義を大に發揚して居るものである、唯御供をして、國家主義が隆盛になつて來たものであるから、宗教もどうしても國家主義とか國民とか道德とか言はないと自己の存在が危いから一緒に言ふと云ふやうな、鰯の魚まじりて言ふのではない、當時の天下は殆ど御國の

意義を忘れて仕舞ひ、京都の公卿鎌倉の武士は無論のこと、儒者も佛者も天下を擧げて御國體の尊嚴を忘れ一方には鎌倉の壓制武斷の政府が權威を振うて居る時に當つて、一人も御國體のことを言ふ者が無い時に於て、日蓮上人が獨り毅然として御國體の尊嚴なることを、生命を賭して主張して居るのである、唯佛敎が日本化したと云ふ言葉では言盡せない、寧ろ佛敎の本分と日本の特長とを結合して更に其意義を鮮明にし發揚したる所のものである、其ことは例へば日本の國が世界に冠絶して居る國であると云ふことを、日蓮上人に依つて盛んに主張せられる、或は如何なる宗教と雖も此日本の國家の尊嚴なることを顯さないやうな宗教は我國に擴むることは出来ない、誰であらうとも教を立てんとする者は先づ日本の國家を祈つて國家の爲と云ふ觀念を先さへ置いて、而して後に學問でも宗教でもやらなければならぬと云ふことを盛んに主張したのであります、故に彼は其行動は非常に廣いのでありますけれども、古來から上人の一代を簡單に言現はした言

葉がある、それは安國論に載起り佐渡に事現はれ蒙古退治に事終ると云ふことを申すのであります、上人一世を通じては立正安國論を時の北條に提出したことが運動の出発點であつて、さうして佐渡に流されて居る間に自分の思想を十分に現はし、さうして蒙古がやつて來た蒙古襲來を撃退した是が日蓮の生涯ちやと云ふのでありますから、日蓮上人が國家的觀念に富んで日本の御國體の尊嚴なることを翼賛し更に其意義を鮮明にし發揚したことに於きましては、我國の有ゆる階級を通じて先づ肩を比ぶる者は無い程であります、光圀卿の大日本史も尊いが、それは澤山の人を寄せてせられたから事業が大きいけれども、日蓮は單身孤立の一沙門で、何も之を輔ける者の無い時に、寧ろ甚しき壓迫の下に立つて、さうして生命を顧みずに御國體の尊嚴を主張したと云ふことは、光圀卿が大名で居て祿の中から十萬石を割いて澤山の人を置いて、ゆつくり寛とやる事業の効果よりは、上人の赤手を以てあの當時主張せられたと云ふことは一層光りあること、私共は思

よのであります、更に此包容の靈教とても云ふべき惟神の道の眞意を發揮したことは、日蓮上人が最も能く爲されて居る、惟神の道を今まで學者が分類して居るのを見ると、第一は儒教や佛敎が日本に這入らぬ前の純神道であります、其意義と云ふものは明かなものがあるけれども、何分にも文字も無ければ思想の交換もないから、知つて居つても少數の人で日本人民の總てが、御國體の意義は斯く／＼のものだと云ふことを津浦浦々の民まで知つて居ると云ふ譯に行かない、それだけ明かになつて居らぬと思ふ、其中に起つた一實神道は傳敎大師が比叡山に於て建立したものであります、是は佛敎の思想と我が神様のことを結びつけたもので、決して惡いものではありませぬけれども十分に意義が進んで居らぬ、弘法大師が兩部神道を立てるに於て、更に傳敎大師の考よりはもう一層明かに佛敎と神道との考を定めました、是も惡いものではありませぬが完成と云ふ迄には行かない、それに反對して唯一神道と云ふものが起つて居りますが、是は淺薄な

なる狹隘なるものである、儒敎を呪ひ佛敎を呪ひ日本の文明を貧弱なる古代の有様に戻さうとした所のもので、彼は老子を非常に愛して居る、仁とか義とか云ふやうなことは言はないでも宜い、人間は虫や獸類と同じ状態唯泰々碌々として居れば宜い、懶巧になると云ふやうなことは不都合であると言つて居る、初めに立派に國體のことを明かにしたのは貴いけれども、思想を發露にすることは惟神の包容性を無視したるものである、それから其次は明治時代に於ける教會前神道で、御嶽教とか丸山教とか黒任教とか蓮門教、天理教と云ふやうなものであります、其中にも多少参考すべきものはありませぬけれども、概括して宗教として見ましても御國體の意義を發揮します意味から見ても、惟神の包容性など云ふことから考へましたならば逆も話になるものではありませぬ、さうして攻撃する譯ではありませぬけれども蓮門教にしる其他のものにせよさう抱負のあるものではありませぬ、大和のおみき婆さんが豆腐屋の婆さんで一列すまして甘露壺とか何

ものである、唯佛敎と神道との結合して居るのを惡く言ふ位が落ちである、其所に一つ三敎融合の神道と云ふものがあります、親房卿一條兼良卿の説である、その源頭は日蓮上人である、其次に社會神道と云ふ伊勢の外宮の度會延佳と云ふ人が大和媛の禁令があると云つて佛敎を伊勢に禁ずる、僧侶の伊勢へ參拜することを許さぬと云つて無開矢鐙に佛敎の惡口を言ひ、日本の神様は佛敎は嫌ひだなんと云ふことを言つて居つた、然るに一方には託宣と云ふものがあつて、神様は佛敎が好きだと云ふことを言はれたことが澤山ある、さう云ふことで爲にする所あつてやつたやうなものである、其次には山崎闇斎先生の聖加神道で儒敎の五行の敎に結びつけ大切にせられることは宜しいけれども、是は宗教としても哲學として見ても大したものではありませぬ、それから復古神道と云ふものが賀茂本居、平田等の先生に依つて唱へられて居ります、是は建國の精神を明にすることに於ては没すべからざるものであります、併し囊に言ふ包容性と云ふ方から言ふと淺薄

とか言ひませぬけれども、さう云ふことで有ゆる思想を吸收して世界最高の文明を採入れることが出来るものでない、もう論ぜずして明かである、其次に起つて居るものは神道に對する新研究である、是は現代の學說に依つて古代史の研究として色々企て、居られるので、其中には色々貴い結果を齎らして居るものもあります、宜ささうに見える所はあるが、是はどうかと言ふと三敎融合派の神道の思想であります、即ち親房卿であるとか兼良卿であるとか、日蓮上人であるとか菅原道真卿であるとか聖徳太子であるとか云ふやうな人の考へられた思想の彼を追ふに外ならぬと私は信じます、此ことを能く御考へになると分るが、神道と云ふことだけを標榜して居る各派はどうしても他の思想を呪ふ傾向がある、眞先生が古神道は一切を包容すると云ふことを言はれるのは、是は實に先生自から言ふ通りに新神道であります、本來さう云ふ意義は惟神の靈教にありませぬけれども、さう云ふ研究を發表すると云ふものは、今まで擧げました中には誰もありません、是は

今までの何れの神道でも左様なことは申しませぬ、てすから新しき意義に於て研究されて居る、包容性と云ふことは是は矢張り三教融合派の系統であります、此所を能く考へて御覽なさい、儒者は神道と佛教を嘲ける者が大部分である、或部分が十人の中の一人か百人の中の三人か四國體と結付けて説いて居るが、多くは神道と佛教を敵として居ります、神道の中では佛教を敵とし佛教を敵としたものはあるが、儒教の長所、佛教の長所を研究して、それで我が神の靈教は斯うだと云ふ立場で主張した者は無い、現れずしてさう云ふ考へを持って居る者はあらうが學派として論じた者は今までは無い、所が佛教は非常な惡いことがあるやうに考へるけれども佛教の一つの立場があります、聖徳太子の當時より今日に至るまで佛教徒からして御國體を傷けると云ふことを申すやうなことは決して無い、日本の國柄を忘れるやうなことを表向きに言ふ者は無い、法然上人は言うたけれども、直ぐ取消して仕舞つた、最初に法然上人が言うたのは一向専念だから行け

とブル／＼と慥へ上つて引退つたと云ふやうなことが書いてあるが、さう云ふやうなことを言つて居つたものである、けれども佛教徒の働いて居る方面と云ふものは詰らぬ所もある、悲觀的に流れたり意平等に流れたり惡いこともあるけれども、包容的精神を以て日本の文明を輔翼しやうと云ふやうなことは、傳教大師も弘法大師も、殊に日蓮上人に至つては考へられた、何故に此理想が惡い、儒者が佛教を敵としたと云ふやうなことは實に愚なことではないか、斯う云ふ日本の御國體とか包容の靈教とか云ふことは、儒者よりも神道家よりも佛教徒がより多く包容性を眞實して來て居ることは明かであると思ふ、現代でもさうであると思つて居る。

それからもう一つは敬神の本義であります、是も神道者が無闇に日本の神様を以て萬能の宗教として立てる者があつたり、或は儒者なんと云ふものは御國體を擁護すると云ふけれども敬神の觀念の方に於ては反對して居る、儒教に於ては元とは孔子は天を祈つた人

ないが後には左様ではございませぬと言つて居る、一體佛教徒はいつても有ゆる思想を包容して進まうと云ふことを考へて來て居る、天海僧正が爲されたのもそれである、日本は神國だから神を敬するは無論のこと儒教は人倫五常の道を明かにして行くものであるから尊敬しなければならぬ、聖賢の道である、佛道は人々を濟度して可く道だ、又三教合して國運の隆盛を圖ると云ふことは日本の數千年來執つて來た大方針だと云ふて居る、林羅山先生が佛教は夷狄の教だと言つた時に、佛教が夷狄の教ならば儒教も日本に起つたものではない、支那から來たものであると言はれると、さうではありませぬ、支那から來ても日本人は實は周の泰白と云ふ人の子孫である、周の泰白が世を遁れて日本へ來た、東海姫氏國と云ふのは周の性が姫であるからさう言ふので、日本の御先祖は周の泰白の末孫である故に儒教は日本の神道の根源であると云ふやうなことを言つた、さうすると天海僧正がウムと睨み付けたもう一週言つて見る首が無いぞと云ふ風に睨み付ける

て敬神の思想を持つて居つたけれども、宋儒以下の所謂朱子學など、云ふものは究理の學、理論の學になつて仕舞つて、神様なんと云ふ觀念を持たない、大抵の儒者が、山崎先生などが日本の神様を敬するのを見てあれは良い儒者だと思つたけれども、日本の神様を拜むやうになつて仕舞つたと云つて、其時の儒者が失望したと云ふが、實に神様なんて仕様がなにものだと思つて居る、無靈魂論、無神論である、大抵さう云ふやうな傾向を後に生じた、今日日本の唯物主義、科學萬能主義と云ふものは、西洋の學問が來てから斯うなつたのでありませぬ、徳川時代の儒者が唯物物の思想を鼓吹して居つた所へ、西洋の唯物思想が滔々と流れて居るのである、それを考へると唯狹隘な神道家が無闇に宗教的の意味ばかりをやつて、さうして外の宗教を排斥するやうな思想も行かなければ、それから儒者が神の觀念も分ないので、敬神の意義を棄て、釋尊の祭祀ばかりをやつて居つた思想も行かない、佛教徒は曲りなりにも傳教大師にしる弘法大師にしる道徳觀念と宗

致的意義を結付けてやつた、是は研究を要することである、私の研究が完全とは言はないが、祖先崇拜、敬神の觀念はどんな工合が正統正系か能く考ふべきである、一片の訓令で之をやれと云ふやうなことでやつて行けると思ふたら間違つて居る、それには私の考へる所では倫理的であつて宗教の意義が包含されて居る所まで持つて行かなければならぬ、それは矢張り佛教徒の健全なる分子に依つて試みられて居る所の事柄であると思ふのであります、斯る意義に於て日本の御國體と佛敎とは誠に密接なる關係を示して居るものと思はれるのであります。



日本佛敎徒に望む

(本講演は上宮教會にて青年の爲に述べたるもの記者の隨意筆記したるもの也。白碧生)

ダールマ、バーラ 講演

私は日本佛敎徒に望むといふ題目を掲げて、眞面目に話を致して見たいと思ひます、私は此度四度目て來朝致しましたもので、何時も此日本の進歩及び此國に關する凡ての事物に對して、深く興味を感じて居る者で御座います、私が丁度一千八百九十三年第二番目に日本に參りました時御座います、今は故人になつた淺井といふ坊さんから一つの佛像を貰ひました、て私は夫をブダガヤの塔の中に置きましたが色々な事情の爲にブダガヤから、カルカッタに移さなければならぬ様になりました、私は其像が再びブダガヤに送らるゝ様に、又日本の佛敎が印度に戻る様に希望して居るものであります、唯今では佛敎といふものは印

感化 我國幼年犯罪者

我國に於ける幼年犯罪者の數の多いのには驚く、明治四十年十月新刑法執行第一年たる四十一年九月迄の未成年犯罪者の統計は

第一日目	壹萬三千七百八十人
第二日目	壹萬一千三百十九人
第三日目	壹萬二千七百八十三人

と云ふ驚くべき多數であるが、眞の犯罪者はこれのみでない、即ち犯罪行爲があつても檢事が起訴をしないで猶豫したもののが、同じく四十年以來第一日目が八千人、第二日目に於て八千九百十二人、第三日目は一萬百七十人と云ふ統計である、この外に不良少年團なる者があつて警察で調査したのが、新刑法執行後第一日目が五千人、第二日目が七千五百人、第三日目が九千二百人の多きにのぼり、現に十八歳未満の受刑者が四千名もあるから、國家將來の爲には寒心に堪へざる所、家庭の教育に最も注意を拂つて訓練を與へねばならぬ。

度にはなく、今から八百年以前にモハメットの爲に亡ぼされました、此千五百年以前に非常に偉大なる佛敎國民がありまして、亞細亞を全體に立派なる高尚なる位置に置く様に成つたのであります、夫は千五百年間存在致しましてさうして全く無くなつて仕舞ひましたのであります、釋尊は自分の弟子或は印度の王たちに、人間といふものが獻身的精神と勇氣に富み且宗教的の教へを守つて行くならば、佛敎といふは殘つて行くし其國は發展するものであると、斯ういふ事を申されて居ります、實際人間が肉體的欲望が盛んに成り贅澤に成るとか、或は又道德上の教を守らない様に成ると亡びて仕舞ふものであります、佛敎といふものは努

力の教であり、活動の教で御座います、此佛教といふものが活動の教である以上は、吾々は非常に活動的になければならぬと思ひます、或者は佛教といふものを誤解して、寂滅を教ふるものであるとか、凡神教であるとか申すのであります、然し若し此宗教が寂滅主義であるか、又凡神教であつたならば印度に教へられる必要が無いのであります、何故といへば是等の教はずてに印度にあつたのであるからであります、歴史的に觀察して見るとエジプト、バビロン、ギリシャ、インツリア、支那等にも斯様なものがあつたのであります、併しエジプト、バビロン、ギリシャ、インツリア等の文明は無くなつて仕舞ました、又支那の儒教も今日では殆ど自分の役目をしない様になつてしまつた、夫て古代の教の中佛教のみあるのであります

擬キリスト教及びモハメット教と佛教とを比較して見ると、キリスト教は佛教より約五百年間若く、モハメット教といふものは、今日では活氣を失ひ衰微して今後文明國の教となる事は恐らく無いと思ひます、是

會の報告の一つでありまして、キリスト教の宣教師たちが書たもので、佛教を妨害せんが爲に出したものであります、歸一教會なんていふ間違つた名稱のもとに斯ういふ事をいふて居る、青年は無宗教に成り、人て、將に潰れかゝつて居る、青年は無宗教に成り、人間は物質主義と成つて居ると報告してあります、私は非常に遺憾に耐へませぬ、日本の諸君を非常に惡口したのみならず、是を害せんとして居るのは何たる事でありませう、キリスト教といふものゝ下に日本人を制しやうとして、それが失敗した爲に他の手段に依つて制しやうとして居るのであると考へます、青年諸君は既に十年前の日露の役にて一等國を制せられましたから、今日は又一つの精神上のキリスト教と吾々との間の戦争に向はねばなりませぬ、先に申した報告は尙言葉を續けて曰く、日本の宗教といふものは非常に腐敗し、日本を道德化するには日本の僧侶に依つて爲さるゝ事は出来ないもので、我がキリスト教といふものが最後の宗教、完全なる宗教である、キリスト教を除

に鑑みても吾々の精神上の所謂活動とか勇氣とかいふ事を益々發展させて、大に努力しなければなりません

印度は今日では三億萬の人口を有する大きな國で古代には丁度六十二の異なつた宗教がありました、其處へ佛が現はれて總ての宗教を制し、偉大なる所の教を廣めたのであります、昔のバラの聖典中には、佛を獅子に譬へたり道を開くものに譬へたり、或は醫者に譬へたりしてありまして、獅子としての佛は山林の中に居る總ての動物を怖がらせました、此山林の動物とはシャモンとかバラモンとかいふ様な印度に居る宗教派の事と御座います、醫者としては味の良い物を與へて病氣を癒したものであります、斯くして傳道された佛教が、後日本に渡り今千四百年経て居るのであります、夫て前に述べた通り印度は千五百年間あつて亡びました、日本にも千四百年間存在して居て、今佛教の危険な時期が到來して居ると思ひます

私は此所に一つの雑誌を持って居ります、是は歸一教

いては世を道德化する事は出来ないと思ひます

歐洲人が日本に来て色々宗教道德の事を説きますが、併し亞米利加などにはドグマとかリンチ法とかいふものがあつて、切つたり焼いたり殺したりするのがあります、彼等は表面平和といふ事を盛んに申しますが、現に亞米利加に行くと彼等は吾々の入國を拒みますし、南亞米利加もオーストラリアも矢張り同様で御座います、諸君が是からロンドンなりニューヨーク、シカゴ、ボストンなりに行きますと、不道德なる事が行はれて居るのを見る事が出来ませんが、大道の中で女が酒をのんで居たり轉んだりして居ります、私はリバープールの町で、自身に目撃したのであります、婦人が酒を飲んで巡查と喧嘩をして居るのを見ました、私は思ひますに、日本に参ります宣教師たちは、本當の事を云ふのでなく、彼等自身の國の中に尙不道德な事のあるのを省みなくて、唯他國に来て言ひたい事を以て居るのであります、私は先に申しました通り三度世界を廻つて來たのですが、一ヶ月前にも布哇に居りま

したが、キリスト教といふものは人を善良にするには力が無いと思ひます、過去四百年間のキリスト教の歴史を案ずるに、有らゆる悪徳の歴史で御座ります、スペインの大將コデルと云ふものが、中央亞米利加方面に行つて、其土地のものを悉く破壊し、ポルトガル人は錫蘭或は印度にある高い建物を破壊して仕舞ひましたドレイバー教授は「宗教及び化学の戦争」といふ事を書いた本の中に四千萬の人といふものが屠られたと言つて居りますし、又コルネル大學のホハイトといふ人は「神學と化學との歴史」といふ書物の中に於て、キリスト教といふものは二千年の後に歐羅巴の文明を戻して仕舞つたといふて居ります

此過去五十年間、英國人は支那人に毎年五百萬ポンドの阿片を賣付けて、支那人を活氣なき國民にして仕舞ひました、是は絶対に眞理でありまして、誰も否定する事は出来ない、私が地中海を通つて紅海に行つた時、テーハスウイスキーを飲めとか、デンゼルネを飲めとかいふ大なる廣告を見ました、是は第一に亞細亞

人が歐羅巴に行つて受取る挨拶で御座います、取りも直さず以上の事實は、歐羅巴人が一緒にやつて亞細亞人を壓迫しやうとして居るのであります、夫れが爲に亞細亞人種の大部分は、彼等の爲に蹂躪されて仕舞ひまして、日本のみが彼等に服せざるのみであります、其處で彼等は日本に阿片を賣らうとしたが夫れには失敗し、次に武器を賣らうとして又も失敗し、此度はキリスト教を賣らうとして居ります

キリスト教は第一に斯ういふ事を申して居ります、「吾は平和の爲に來たるに非ず、劍を與へんが爲に來れり」と又「劍を持たざるものは己の着物を代へて劍を取れ」とも云ふて居ります、又「吾は親子父子或は母娘兄弟の間を損はんが爲に來れり」とも申して居る斯の如き宗教の傳道師だからこそ、彼等が日本に來た事を書いた中に平氣で、日本は不道德だとか虚吐きだとか言はるるのだと思ひます、是等は同様に支那、緬甸、印度にも申して居ります

吾々がキリスト教徒、宣教師たちに告げたいのは、

自分の國の有様を省みよといふのであります、キリスト教には倫理心理化學哲學といふものはありませぬ、化學といふものは物の發展を教へるもので、生物を少しい胚種より發すると教へるが、キリスト教では土より起るものとし、「泥の子よ立上れ」と申します、泥より出來た人間は優等なる筈はないと思ふ

私は十二歳の時から聖書を研究したが、何處も不快の念なしに讀む事は出來ませぬ、アブラハム、ヨハネヤコブの三人は聖書中の主なる人でありますが、其性行に就て考へて見ると虚ばかりいふて居る、て新約聖書などの中には非常なる矛盾があるのであります

數年前の事でありませんが、私はロンドンの或る癡癪病院に參つた事があります、所が其病院院長が私の所に來て申すには「貴方に逢うて愉快に堪へませぬ、私は多年の間人間を氣狂にしたい研究をしたのであります、如何なる宗教が人間を氣狂にしないかといふと、宗教中佛敎のみであらうと思ふ、今キリスト敎がロンドンに居たらば、此病院に入れて仕舞ふ」と申

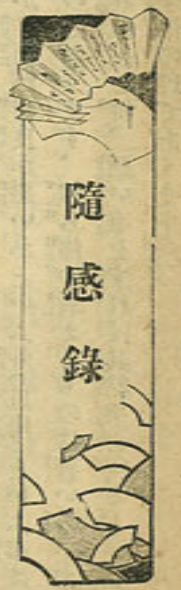
された、何故と申しますとキリストが三年の間に爲した事は、氣狂的であつて罰すべき事ばかりであります

印度には唯今三千のキリスト教徒が居つて、夫はカラヤ種族とセンダラ種族で御座います、布哇にも大勢居ります、是等の者は實に意外なる不道德な事をして居ります

私は今日此處に是丈の事をいふたのは、詰り此歸一教會の報告書を讀んだからであります、諸君の國は既に二千五百年間續いて居られるし、佛敎も尙ほ盛んで御座いますから何處迄も立派なものとして保たれ、此佛敎に依つて活氣と道德とを學び國の發展に盡されたいと思ひます

佛敎の教へは極めて單純で、活動と努力と精神といふ事で御座います、此佛敎には「思辨」といふ事は無いが唯何が善良か悪いかといふ外(思辨)といふ事は無いのであります、即ち佛の教えるものは善い事をすれば其結果を得、悪い事をすれば其結果を得るといふ因果應報の理であります

青年諸君は未だお若い方ですから、殊更に申したいのでありますが、活動せよといふのであります、諸君は日本の基礎でありますから、善良なる人間として決して肉欲主義に成らざる様に願ひます、何事をするにしても先づ自分に問はれて成る可く解決されん事を望みます、すべての事すべての行ひ、すべての考へといふものの中には、因果の法則が備はつて居ります、白人等がいふ事を決して軽々しく信じてはなりません、自分自身で以て事の真であるか無いかを穿鑿すべきであります、なんでも人が言ふからとて信じてはいかぬ、自分で因果の法則に叶つて居るかを見て受取らなければなりません、諸君は獅子の様に奮迅されて、他の宗教を求めざる様に願ひます、吾々は非常に高潔なる血液から出て居るもので、佛教を過去二千四百年間持つて居るのでありますから、どうか此本の中にある様な事を信ぜず又彼等に不道徳なる人種だとか、非常識なる人種と言はれない様に願ひます、諸君は即ち戦争に勝れたから、精神上の勝利も同様に得られん事を望みます



隨感錄

現代は自由個人主義の方面が著しく發達して來たけれども、而して之に對する勢力が又頗る強大になつて居る、即ち團結の力である、個人が如何に自由でも社會の生活が融通の付かぬものであるならば、危険なる動搖が起る、どうしても團結によりて統一を確定せねば秩序が立たぬ、秩序がなければ亂脈になる、何事も仕上らない、世の學者も近代文明の特徴は即ちそれであると論定して居るが、この團結の力の強大なる所以に就ては、日蓮上人が力を極めて門弟を警告したる問題で「異體同心なれば」各般の事成功すべしと教へ、一定の主義理想の下に協力して活動すべきことを訓戒せられて居る、現在の日宗教團は同じ日蓮門下であるが何が故に團結の實を擧ぐるを得ないであらうか、少し大局に眼を注いだならば小見小我を打捨てる事が出來やうかとおもふ、大道念を養へ來りて國民思想の現状を想はよ、區々たる問題は論ずべき限りでない

ば一切衆生救済の爲には、娑婆三千大千世界釋尊の捨身命處にあらざるなしと説かれてある

(三) 印度降誕の釋尊

法華經を我が得し事は薪とて
榮摘み水汲みつとめてぞ得し

の讚佛歌は、光明皇后の御製と傳へてあるが、能く釋尊の御修養を一首に讀み表はしたものである、釋尊悉達太子として十九歳の御時、中天竺迦毘羅衛王宮を出て、檀特山に入り阿羅漢迦摩羅の仙に事へ、御年三十歳臘月八日明星出る頃、大悟達の曉に至るまで難行苦行十有餘年の間、薪を採り水を汲み夜の眼も眠らず一麻の衣一米の食、並み大底の御修行ではない是皆一切衆生をして如我等無異の覺りに入れしめたいのと大慈大悲である

(四) 日蓮上人の修養

日蓮上人も其の如く、二十八の歳より鎌倉を始め比叡高野奈良南都、有ゆる辛苦の修養を重ね、智慧を虚空菩薩様に祈りては辛倒血を吐くに到り、修養既に



釋尊の修養と現代の文明

僧正 野口日主

一) 天才と修養

佛教は天才主義にあらず、修養主義なり、故に本佛釋尊にして、尙ほ世々番々修養の儀範を示されてある

二) 釋尊の因位

釋尊菩薩因位の修養、眞に無量無邊である、先づ花を見ては、只美しとのみ見ない、自分に具はる心華を開き、人にも又心の華を開かせ歡喜に住せしめたい、又海を見れば、只廣ひとのみ見ない、我が悟りの智慧をして海の如く廣からしめ、一切衆生も又々悟りの智慧をして海の如く廣からしめたいと念願する、花を見て一枝をと云ふのと餘程違つて居る、其他地に就ての修養、戒に就て、堪忍に就て、靜慮に就て、智慧に就ての修養等、枚舉するに遑あらずである、經文に依れ

成りてより更に十有餘年の修養を重ね、三十二歳始め
て清澄山頭旭日に向はせ玉ひ、末法萬年の大教を宣示
せられたのである、夫より御一代の間數限りなき大小
の難を凌ぎ、百折千回不屈不撓の御奮闘は、皆是れ二
十餘年の修養より胚胎せるものと拜せざるを得ない

五) 昔しの高僧

法顯三藏玄奘三藏等の教傑が志を立て葱嶺砂漠を
渉り、印度諸國に留學せし事蹟は眞に壯絶快絶である
今日の旅行と違ひ、山に猛獸あり水に毒蛇横はるを單
身孤影一文なしにて踏出したのである、無謀と云はゞ
謂へ、天を合手佛を相手である、佛意若し不可ならば
此身を佛天に供養して來世を待つゝの意氣込であるから
強い、世間立志の人も多くあるが、高僧傳神僧傳にあ
る如きは少ない、今や我國も雄大の人物を要求する上
に於て、小學教科書に高僧傳中の雄なるものを入れた
いと思ふのである

六) 現時の文明

現時の文明は平民的で、脱臼に云へば下男下女的に

國民である、皇太神躬親ら稼穡遊され、躬親ら養蠶せ
られ、躬親ら造營せられ、躬親ら孝養、躬親ら文武萬
世の基を然させられたのである、報本反始大に修養に
努力すべきである、古賢も「日本は只大乘の種性のみ
あり」とは是である、大乘とは佛乘である、佛乘を行
するは菩薩なり、菩薩とは大神國土國女である、日
蓮主義は身讀主義なり、法華の菩薩は無數手である、
遠き國は八十綱かけて引寄するの國談、末法萬年閻浮
統一の大慈悲教、此國に生れ此教を信ず、豈に優曇華
の花咲き盲龜の浮木に逢へるよりも幸ならずとせんや
本因本果本國土三妙合論の大信念に住し、子々孫々に
至るまで、此主義もて法國莊嚴可期也



發達し來て居る、昔し貴人は出づるにも多くの供廻り
を連れ、輿に擔がれて出たものであるが、今は單身獨
歩靴類まで自身で提げて歩く、昔しの奥さんは大勢の
女中を召使ひ、整の物を横にもせぬが奥様であつたの
が、今では臺所もする料理もすると云ふ奥様が時勢的
だと云つて稱贊を受くる、さうならなければならぬの
である、西洋にては國王夫人と雖も自活するだけの手
藝は持つて居るとの事である、尊い事である、金言にも
「人の手数を煩はさぬ人程神に近ひ」とある、味ふべ
き金言である、之が西洋風かと云へば、東洋亞細亞に御
降誕になられた而かも王家に生れた釋迦牟尼佛も、薪
を探り水を汲むの修行を爲されたのである、況んや吾
人をやである、煩悶を除かんと欲せば先づ手足を働か
せよとの言もあるが、そうなれば煩悶も少ない譯であ
る、自から助くるものを天は助くるのである、身心の
修養が肝要の譯である

七) 日本國民性

天照大神を國祖とする我大日本帝國國民は大なる修養

雜記の中より

▲健康と體重と云ふ關係を調べた統計によると、日本
人は歐州人に比して體重が軽い、即ち子供の生れた時
は、獨逸が男八七六匁、佛國が八四二匁、日本は七七
一匁になつて居る、之は母の身體が弱いからだとい
ふ。

▲文部省六月二十日の調査によると、博士の現在數は
七百四十八人、法二二五、理九四、醫二五七、農二三、藥
二一、林一三、工一三八、獸一三、文七五人なりと云ふ。
▲六月一日現在の華族總戸數九一七戸にして、公一七
候三七、伯一〇〇、子三七七、男三八六なりと云ふ。

▲世が進んで競争が劇しくなつてくると、人の命數も
短くなる様に感ずる、今の世界強國民の平均命數で
五十年の壽命は保たない、英米は四十四歳、日本は四
十三歳になる相だ。

▲商工業の發展に伴ふて多數の工場が出来たので、男
女の職工が殖えた、全國を通じて八十四萬四千五百四
十五人で男工は三七二六六七、女工は四七一八七七で
あると云ふ。

轉教の記

三上白碧記

日蓮主義は孤軍奮闘道に殉ずるの主義である、されば「晝は暇を止めて」吾が天分遂行の成績を省察し、「常無懈倦」の熱實の道念を涵養して、一心精進の妙行に奮勵せずんば、佛子たるの幸榮を擔ふことが出来ぬ、經典には「以道受樂」の聖文あり、道法色讀の生活により無限の樂みを得るは、蓋し人生上に於ける絶待の光である、眞に壯快である、予は土用熱鬧の時機を利用して日蓮主義の靈光の一分なりとも發射せよと志し、八月十六日都門の紅塵を去りて傳道の旅程に就いた、十六日午後二時千葉郡村田泉福寺に講演を開き思想の根底に活力を賦與するものは日蓮主義なる所以を論明し、二時間半の聲益を布き、本誌讀者大久保半次郎氏に送られて濱野發に

乗り、稻葉驛に下車して君津郡中島及爪倉の寺院の状況を視察し、此地に於ける信仰状態や風教の趨勢を調査し、當事者に深刻なる注意を與へて中島本永寺に一泊したが、十七日木更津町より自働車を驅りて佐貫町に着いたのは午後一時、少憩後日蓮上人の卓越せる識見抱負を語りて、雄大なる人格を紹介すること三時間、予も最も熱心に講説する所あつたけれども、聽衆は長時間なりしにも端座敬聽して居つたのみならず、何等か心霊の響きがあつたやうに見えた、ことに學校職員と青年の諸氏のみであつたので、何等かの機會に於て講演の趣旨が實現し得らるゝことであらう、十八日朝同町妙勝寺を視察し終りて一里半餘の山道を辿り、飯野村法性寺に到る、午後二時開講、人は善事を行ふべき所により説き起して不滅の生活を述べ、信仰の意味を懇説して聽衆の佛性を啓發するに努めた、同日午後八時富津町長秀寺に開演、聽衆

は役場吏員教員重立し者にて力強く思つたので、現代人の病弊なる軟弱の精神に一鞭を加へ、職業神聖の理義を説いて優秀なる成績を擧ぐべしと結び、極力發憤と警告を促がすことに努めたが、聽衆はかく感謝を表して散會したのは午後十一時に近かつた、十九日「富津町より腕車にて木更津に向ふ、東京灣の波靜かに沿道の山青し、風光絶美にあらざるも心氣爽然たるを覺えて俗念おのづから去る木更津より輕便鐵道に乗り三十分にして馬來田驛に着いた、篤志の出迎をうけて舟目の本立寺に到る、同寺は日什上人傳道の靈地にして庭前には上人手植のカヤの古木がある、鬱蒼として靜寂を示し懐古の情さらに深きを覺ゆ、凡そ靈地には不言の教訓が潜んで居る、何となく神々しく直感するものがある、心靈の琴線にさゝやきを與へる、そこに威靈に感孚するものがある、午後三時開演、青年の聽衆を中心として積極主義の意義と日

蓮上人の活動を論明したが、敬虔の態度を以て傾聴して居つた、聽衆中の篤志者星野、保坂、永島の三氏は發車時刻まで風教改善に關する意見を交換して居られたが予の深く多謝する所である、此夜木更津町某旅館の客となりて十二時過ぎる迄遺文を拜讀し、知己に送る書狀數通を認めて眠りに就いた、二十日濱野驛に下車腕車を驅りて市原郡大作法行寺に着いたのは午後一時既に本堂には二百五十の聽衆が詰かけて居つた、平易の語調もて生活と信仰の關係より説き家庭の中心は信仰に存する旨を事實的に證明したので、感に入るものが多かつたのを見うけた、二十一日附近寺院の經營状況を視察し、午後二時長生郡長柄村上野妙興寺に講演、同寺は十數年前予が學生時代に住職たりしことあるけるゆへ感想さらに深きものがある、聽衆は全部男子にして女性一人も居らなかつた、予は物質上の充實を圖るは最も可なることなるも人の

行爲は思想の發表なれば、精神訓練に努むるこそ生活上の根本要義なりと説いた、多數の青年は心廣きを感じて悦びに充たされたやうに見えた、同日夜同村山根飯尾寺に開講、夜雨少しく催して居つたが道を求めんとして講壇の前は賑かであつた、渡邊師開會を宜し、予は信行に在るものは満足と悦びがあることを歴史上の人物に由て證し、各自の生活職業に興味を有せよと懇示して散會したのは十時半であつた、二十二日午後三時茂原町長谷妙照寺に開演、秋山氏の佛教の地位に就ての講話ありたる後、人は横着すべきものでなく働くべきものであると云ふ事を幾多の事例を擧げて説いた、聽衆は能く一場の講演を理解したやうであつた、此夜箕輪圓藏寺に宿り、二十三日は高山宇津木兩師と共に市原郡内田村本傳寺に行つた、旅程五里、鶴舞町にて三橋師の出迎をうけ、山を登り谷を超え險路を行くこと一里、午後二時國分師開會

を告げ、三橋師日蓮主義の活動部面を紹介し、予は現代青年の薄志弱行を痛撃して強烈なる意思を鼓吹し、人格の完成は思想訓練に基づくべき理義を論道すること三時間熱烈の辯を以て聽衆の肺腑を衝いた、ために感興に入るもの少なからざるものがあつたと見えて、同日夜青年會の主催にて開講、血氣の青年室に滿つるや國分師開會を告げ、予は修養上に於ける模範人格を日蓮上人に求めて自重獨立克己積極活動の各方面を説いて活ける教訓を示したので、靈力にうたうてあつた、二十四日内田本傳寺を辭して長生郡小樽連成寺に着し講演開會、蓋業多忙の折柄なりしも村長其他の參聽者多く、家庭の中心點は信仰により信仰の効果は家庭を圓滿ならしむ所以を祖訓を引いて懇説し、感興多大であつたとおもはる、二十五日午後二時同郡查場本大寺に開講、聽衆百餘名國民道徳の實行と宗教の權威に關

して平易なる説明を試み、大に信
仰を啓發するものがあつた、二十
六日午後一時關村本盛寺に開講し
て百餘の聽衆に心靈の開展を爲し
合掌を教ゆ、同日夜五井圓成寺に
開きしが、風雨激しく聽衆如何に
と案じたるも、熱心なる求道者は
詰めかけ來りしかば、予は開法の
功德と思想向上の關係を説き示し
て日蓮主義の信智一體の妙行を教
へたので、在來講演を聴くべき機
會の少なかつた聽衆は大に満足を
表して居つた、二十七日午後二時
驚大多和來助氏宅に同催、同氏の
平素の信行の徳は暴風雨なりしも
參聽者佛前に端座して予の一時間
半の講説を傾聴して居つた、大多
和氏は本山信徒惣代にして熱實な
る信行家なるは既に一般の認むる
所、ことに其家庭は地方における
模範的狀況にあるは同家の榮譽と
する所である、二十八日午後二時
粟生野圓立寺の施餼會を利用し
て開演、聽衆二百餘、祖先崇拝は
國民道德實行の一要件なりと論じ

て實證主義を鼓吹し、墓碑神聖の
意見を發表して參拜の徳を述べた
が、此の事實上の問題にはいたく
感動したるものあつたやうであ
つた、同日直ちに腕車に身を托し
て大綱可に着いた、小川時計店に
て晚餐の供養をうけつゝ浪花節の
蓄音機を聞えたと云入道と樂遊の
十八番の語り物であつた、予は雲
入道も樂遊も數回會つたことがあ
るのみならず、二氏共に日蓮上人
に對する信仰家で、樂遊は予の信
徒の籍に在る者愛護遊ける時予が
悟道の妙義を授けたほどで、一し
ほ無量の感にうたれたのである同
夜の終列車に乗りて兩國に着いた
のは十一時半であつた、靴一個と
予とは車に揺られつゝ統一閣に歸
り、静かに三寶諸尊に布教の實蹟
を奉告して十三日間十八回の講演
に於て宗教徒として何等かの印象
を與へ、信仰の靈氣を加へたこと
もあつた、若し夫れ一道の光明を
認めて信仰に進み得るものあらば
予の満足に堪へざる所七里法華の

靈域は道を容るゝ量の無いのでは
ない、過去百餘年間日蓮主義の學
風が信行的でなく天臺流の理智に
傾いたので、宗教道義の熱烈なる
信念を鼓吹すべき傳道法式を爲さ
ざりしに基因せるものと思ふ、ま
れば批評的態度だけ進んで來た
のであつて、傳道者も専門用語を
以て理屈を説いたから、そこに渴
仰的精神は失せたのであらう、け
れども時代半面の趨勢は人に宗教
信仰の必須要件なるを自覺せしむ
るものがあつて、四悉檀を巧妙に
應用して諄々能く之を説けば勃然
として燃ゆるが如き信仰を發起す
ることは疑ふべからざる事實であ
ることを認めた、何がさて欣ぶべ
き現象と云はざるを得ない。



新しい婦人に與ふ

三 上 白 碧

婦人問題は世界何れの國でも火散を散らして居る共
通問題である、我國に於ては昨今非常にハケ間敷い、
所謂新しい婦人がそれてある、而して新しい女と
名乗るものが日一日と殖えて來る、之等の多くは直輪
入の青い酒を飲んで酔ふて句駈を卷いて居るのである
が、其主張を調べて見ると、男と同じく人である上は
自主獨立の活動家とならなければならぬと言つて、醉
の加減が中々面倒な理屈を吐いて居る、成程人間問題
として考へたならば、男女の差は元是れ一なるべき性
質もあるべきならんも、男女の二性に分れて居る以上
は全部同じであるとは云へない、新しい婦人がいま
さら新らしく發見したかの如く唱へて居るのは、餘程
古い時代から存在して居るので其新しい女の性質經

験には舊い分子がある、過去の歴史とがとは現に生存
する人には關係も影響もないと云ふが、自己の親及祖
先の生活を否定し數千年來鍛たる民族性の發展を無み
する譯には行かない、又過去の或時代に二三の分曉漢
が女性格を如隸視したかは知らんが、女性本來の眞價
を輕視した事實はない、然るに壓迫より脱け出て、自
由の天地に活動し、女性活動の新生面を開拓せなければ
ならぬと云ふのは、一應理義ある主張の如く見ゆる
が、徒らに西洋の惡思想に捉はれて日本女性の優秀な
る美點を忘れて居るので、自己先天の特性を無みする
ものである、新しい女は人類本位の立場に於て女性
の地位を高むるなんど騒いで居るが、男でも女でも
人類と云ふ宇宙の一員であるけれども、現在のこの身
この生活は、單的に人類としての生活關係ではない、
此國を離れ此地を去りて生存を遂ぐることは出来ない
從て家庭の一員たることを拒否する譯には行かぬ、
人は互に平等的地位に在るから、男子に屈することは
ないと言ふて盛んに利權の擴張を唱へるも、其擴張

すべき點は既に神代の昔より伸張し尊重されて居るの
 て、今の新しい女が叫んで居る法律の權義の問題は、
 あまりに無謀の企て實行し得ざる事柄である、女性
 が男子と同じく法律制度の主體となるのが當然である
 と云ふが、女性の儼弱なる體質を以て戰陣に立つこと
 が出来やうか、彈丸雨飛の間に奔馳する事は無理な話
 て、女性の生理上堪え得べきことでない、既に神明の
 大慈心は其分業と性格とを明かに區別されて居るので
 あつて、如何に新しい女が威張つたからとて、當面
 の責任者として何等活動の用に立たない、巧みに小理
 屈を列べて思想界を搔き亂すなどは、天の配濟を重ぜ
 ざる不心得者である、また女性の結婚は男性に征服せ
 られた符號であると云ふが、結婚が何うして征服であ
 らうか、自由を檢束する義理に當るか、少しも纏つた
 理義が立たぬではないか、女性が其生理的關係より見
 て結婚するのは必然の合理である、其女性の自由を伸
 張し地位を確保するに於て、結婚は唯一の保證である、
 結婚によりて自由活動の舞臺が現はれる、家庭を中心

として女性の智力と體質とに堪え得る仕事に勵む、そ
 こに女性の眞價は發揮せらるゝのである、家庭に働
 のが舊思想で壓迫の意味が加はつて居ると云ふのは、
 病的なる放縱生活に促はれて居ると云はねばならぬ、
 獨立自主と云ふ事は悪い思想であると斷定しないが、
 飛び廻りて浮いた調子の小理屈を捏ねることが獨立で
 ない自主でない、さう云ふ態度では女性としての品格
 を養ふことは出来ない、品格は理屈を知つて居ること
 でない、自己の地位と職分とを内省して眞面目に働
 て行く處に徳が積まれる、其徳の積まれたるそれ
 自身が品格である、品格のない人は即ち道德的生活を
 否定するもので、所謂自然主義本能主義の單調無味な
 る瞬間生活を送ることになる、現在自己の有限性に
 無限性の内在して居ることも知らぬ譯で、獸的生活に
 惑ふて居る哀れなものであると謂はねばならぬ、それ
 ではあまりに情けない、新しい女は少しく自己の智
 能あるを誇りて西洋思想を丸呑にし、國風民情を排し
 女性の體質をも顧みずして、漫りに奇矯の言を弄する

は不謹慎で舞臺も甚しい。

新しい女よ、いまして疎闊せられた人格を一轉し
 て高めようなど、叫ぶを止めよ、其叫びの如く女性を
 蔑視したる歴史の無いのみか、反て女性の努力に向つ
 て最大の敬意を拂つて居る、其効績を認めて人格を尊
 重して居ることを知らねばならぬ、特に日蓮上人の婦
 人に與へたる消息には「男の仕業は女の力なり」と宜
 べて、女性内助の力がいかに偉大なるかを論じて居る
 男性が對外的活動の成功は、女性後援の賜なりと
 は、女性の人格を認めて敬意を表して居る實證ではな
 いか、又「矢の走るは弓の力」なりと譬へて女性を弓
 の力なりとして居るとは、こゝに尊とき眞理を含んで
 居るではないか、この文の内包眞理を味ひ來らば男女
 相互の關係が圓滿に調節せられて居ることが解る、或
 る意味より考へ來ると、矢の走るは弓の力に依るので
 あるから、そこに平等の地位を認められて居る、一方
 が主たるもので一方が従たるものと云ふ階級的關係で
 ないことは明白である、即ち少しも壓迫を加へるもので

ない、互に其爲すべき職分を守りて忠實に努力して行
 へばよい、斯かる平等の地位にあるものではあるが、
 此の平等の状態を保ちて行くのには其一步を譲ると云
 ふ謙遜の美風がなければならぬ、穩健にして温かき情
 操が其間の連鎖となるべきで、若し單に平等の一面の
 みを骨張して相互の秩序を維持して行くことに氣付か
 ぬならば、人事上の關係は何事でも破壊されて了ふ、
 新しい女は其主張する所は秩序と云ふ觀念などは微
 塵だも有つて居ない様であるが、此思想によりて萬事
 を處理するときは、其だ恐るべき弊害が起る、危険な
 る思想の徑路である、日蓮上人が女性の地位に對する
 訓誡を示されて居るが「女人となる事は物に隨て物
 を隨へる身なり」とある此の警訓に包まれたる思想は
 女性格を修養し發展せしむる根本の信條とも見るべき
 もので、落付きのある女性は斯かる道を辿り行いてこ
 そ得べきもの、今の新しい女よ、其輕躁にして傲慢な
 る叫びは、一種の病想であるから自由の天地を開き得
 ないのみか、遂には七顛八倒して煩悶苦惱に沈む、
 はやく病夢より醒めて日蓮上人の警訓の靈聲に聞けよ
 然らば其心に清新なる慰安と満足を得て光りある人生
 を送ることが出来る。

佐渡に於ける日蓮上人の外護者に就て

小笠原毅堂

陰れた事を知らずするものは善に就け惡に就け或る問題になつて居ます、彼の佐渡塚原の雪中、供養を獨りてして居ると傳へられて居るとに就て、阿佛房ばかりでない事を御遺文の上に見出しました數個處を一言して置たいと思ひます。

今日まで塚原の雪中供養を阿佛房計りとして傳へ居りまするけれど、それは多分代表者を擧たといふものではないでせうか、自分は此の供養したものと誰たるをいふのではない、たゞ塚原に於ける供養の人々を見たいといふのですが、要するに外にも夜中雪風を犯して飯櫃を運て供養したもののあることを言ひたいのです。

周囲の事情が壓迫にもせよ、如是窮屈の間に埒の

の「入道」夫婦にも、夜中に食を運だつとを晩年身延在山中喜んで御禮をいれてをる。(一二五二)

阿佛も國府に住居たともある、けれど、餘の御書によれば「この入道」には子供がない、阿佛とこの入道との別は御消息によればすぐ判るのである、(一七六七、一九五二)、阿佛の夜中供養のとは御消息にもよく書てある、(二七六〇、五)、要するに遺文の中で其關係するものを比較して見たならば、頗る痛快に感ずるものがあるであらうと思ふ、試に此に關係する御遺文の丁附を示すとにする。

阿佛夫婦のみ夜中供養せしにあらぬ云云は遺文一二五一の初行、及但書、及びこゝの入道には子なき御遺文は紺入道御返事一一二七、之は阿佛房及阿佛尼に對する消息の比較研究上必要たればなり、阿佛房も國府に居りし事ある故同く國府の云云といはんかなれど、之は御遺文一七六一及一九五二とを参照せば自ら明了する事なるべし。

大塗人様の御言葉にも、夜中に塚原へ食を送りくれ

あいた事を考へねばならぬ、人の多くは塚原三昧堂の四壁落ちて寒を凌ぐに足らぬといひますが、事實はそれほどのものではありますまい、伊豆の流罪のをりすら、村はづれの佛堂に置て日常の食事だけは支給してをります、其頃の預りの様子を見るに付けても、唯だ野放しにしたものではありませぬ、夫々責任者あつて監視の事に従つたものです、三昧堂は云々とありまするが、能く其當時の事情を知りませぬと預りのもの計り悪いやうに考へらるゝことになりませぬ。

要するに一人扶持のものゝところへ二人三人の弟子のものが居りまする事は、所謂の經濟が足りませぬ、一谷書にもあるやうに、喰べものを少しづゝ分けて食べたといふことにもなります、如是事情は塚原といはず、一の谷といはず皆分りきつたとと思ひます。

此間に於て夜中に食事を奉つたものは必しも阿佛房計りでないといふとは人情の上からしても考へらるゝとて、古人の傳説を破壊するつもりで之をいふのでないのは諒して貰ひたい、大聖人様遺文の中にも「こ

し其志の嬉しと仰せらるゝに、よもや二様には候まじきを阿佛房のみなりせば、ともかくも、この入道夫婦も然りとせば、后世以て之を一人に私しにつけてこの入道を知らず顔するとはよろしからぬとはあらぬか、阿佛房とても同行の清淨の行功を今に認めしむるに及んだならば、寧ろ淨心の事業の伴侶を喜ぶであらうと思ひます、福分を分けるといふ意味で、如是一言しましたが何れ機を得て詳細御話する時もありませう、如是記しますると阿佛房夫婦の行功を無視したやうに論難する人もありませうが、夜中に食物を運て供養したとが、外の信者の中にもあつたとしたならば、從來の歴史の上にも多少訂正してもと思ひます、但し國府の入道云云といふとは阿佛房のとてであるといふ反證もありませうが、前に擧げました諸御書を連讀比較したならば、まさか左様なとも言はれぬと思ひます。

活動史

東京

人を救ふの運動は一刻たりとも猶豫すべきでない時代の濁流は澎湃として人心をさらはんとして居るげに恐ろしき限りである吾等が穩健なる思想を天下に傳へて覺醒を促すもの一片愛民護國の赤誠より突發する所されば人は白沙青松の間に涼を貪りて居るが吾等は夏の暑さも何のその講壇に立つて侃諤の論敵を打つた

▲十七日午後二時日曜講演、熊井本光師は日蓮主義は對立的にあらずして各教統一の使命を有する理義を明かし笹川權僧正は信仰は單自利にあらずして菩薩的化他行門に進まざる可らざる趣致を説き慈悲の本義を論じて日蓮主義の雄大なるを説きければ本有の靈光に照されたる感にうたれたるもの多きを認めたとが講師の熱誠はいたく聴衆の肺腑を衝くものがあつた

▲二十四日午後二時日曜講演、鈴木權僧正は家庭を治むるには徳教の力に依るべしと説き山根權僧正は不斷の生命と活動の關係を述べ日蓮主義は久遠の本源より人類救濟の活動に出づるものなりと結び生活上の競争に戦ひつゝある聴衆に尊と教訓を與へて感動を起さしめた

りとの精神生活の意義を述べ久しく北海道巡教の爲め尊容に接せざりし本多大僧正は國民思想の涵養と題して國家の起原及目的を論じ日本建國の理想を論明して日蓮主義の卓越せる識見に及び滔々二時間亘りて廣長舌を振はれたるが回を重ねて本題を講せらるゝことなれば參聽者は無限の教益を得ることであらう

▲三十一日午後二時日曜講演、井村權僧正は有限の生活と富とは尊と意義を有せず永久に亡びざる心的活動の富を求むべきを説き日蓮上人の日本第一の富めるものな

▲八月十五日小石川雜司ヶ谷本教寺に講演開催し熊井師井村師の生活と信仰との調節に就て適切なる教示ありしが聴衆は何れも大法の尊とを念ひ信行に勤むべきを覺るものがあつた

▲九月三日午後七時淺草永住町妙經寺に講演を開き野口日主師の調育上の法話ありて法の悦びに充ち日蓮主義の活動意氣に感じて各自の心に鞭を加へ修養に努むるの念いと強きを増すものがあつたと云ふ同講演は能く中西芳山海野竹譽等の居士發會以來盡力する所多く外護の本領を全ふして功德を積

▲八月十五日小石川雜司ヶ谷本教寺に講演開催し熊井師井村師の生活と信仰との調節に就て適切なる教示ありしが聴衆は何れも大法の尊とを念ひ信行に勤むべきを覺るものがあつた

本堂論

今成日誓師

同日午後七時再び開會

國民道德と日蓮主義熊井本光師

宗教と人道 笹川日誓師

久遠の生命 今成日誓師

小田原は青年有爲の弘法家ありて平生の化儀見るべきものあり寺檀の曙光を認められ飯田は萩原師の健闘振り夜間講演に於て遺憾なく實現せられ聴衆三百眞拳に向上の修養に資するの教綱を求めつゝあるを見る

阪教界に於ける日蓮主義の勢威は大に見るべきものあると思はる願はくば兩師共に道の爲に自重し祖道の發揮に努力健闘せよ

本堂論

京都

同日午後七時再び開會

國民道德と日蓮主義熊井本光師

宗教と人道 笹川日誓師

久遠の生命 今成日誓師

小田原は青年有爲の弘法家ありて平生の化儀見るべきものあり寺檀の曙光を認められ飯田は萩原師の健闘振り夜間講演に於て遺憾なく實現せられ聴衆三百眞拳に向上の修養に資するの教綱を求めつゝあるを見る

眠れる京都伽藍佛教を以てのみ誇れる京都に一道の活火を與ふるものは日蓮主義である教團の數は多いけれども活ける信仰を説いて人心の根底に靈氣を加へ活動の力を賦與するものは吾等の運動を外にして見ることが出来ない引込主義の京都に於て夏休みの八月に講演を開いたのが既に異例である八月一日妙滿寺に國禱會を催ふし野老師の處世の要義を説かるゝありて感動を興へ十日午後七時護正會を開き川崎師の犯罪と懺悔との關係を述べ十九日盆會を修し式後野老師の講演あり同日夜間講演會を開催し石井師の教傑傳を語りて日經上人に及び銀井師は法華經に表はれたる常住論を述べ野老師は日蓮主義の特長を述べて國家觀を評論し野口日主師は個人と家と國と宇宙との關係を語

遠州

明治天皇一周年に當らせ給ふ七月三十日遠三寺院

豊橋妙圓寺に集合して嚴肅なる一大法要を営めり當日參拜者の主なるは第十五師團各團體長將校婦人其他市内宮公吏等にして式後山内櫻溪氏の追悼講演ありたりと云ふ

大阪

同市は梶本日種師の奮闘によりて既に一城廓を築き上げしも更に新らしく高木師の赴任を見るに至りたれば一段猛烈なる運動を開始せらるべく今後大

みつゝありと云ふ

▲品川教界には笹川權僧正部下を督して家庭に公開に教壇を設け熱烈なる外護者を養ひつゝありと云ふげに尊と活動なるかな

神奈川

相南の地は近來著しく發展し來りて都人士の別邸到る所に設けられ人心稍や浮薄に傾かんとするの風なきにあらざるも信仰の熱火を點じて宗教の意氣を與へば靈光輝いて人心の歸向明かなるべくこの事たるや土地の進歩と共に重要な要件なりと謂はねばならぬ八月廿八日午後二時小田原町妙經寺に大講演開催

開會の辭 有田宏道師
現代の思潮 熊井本光師
意氣と節義 笹川日誓師
國民の大理想 今成日誓師
三十日午後二時戸塚在飯田本興寺に開催聴衆能く熱心に傾聴して居つた

開會の辭 萩原啓門師
道德の意義 熊井本光師
意義ある人生生活笹川日誓師

りて甚大の訓化を興へ廿日顯正會の例會にて金光師の遺文講義により各自の信行を温めたりと云ふ

堺

八月二十日夜同市妙満寺に演説會を開き川崎英照師南無の意義を説明して信仰の妙義を語る二十一日夜同寺に研究會を催ふし川崎師は將來の宗教に就て國民性を助長する日蓮主義に依るべきを詳説せられ強き力を加ふるものありたりと云ふ

千葉

八月一日千葉郡蘇我町小學校に簡點呼行はる中村權僧正萩原會雪師出席し三浦中佐の請により中村師は日蓮主義と精神訓練に就て一場の訓育を試み五百の在郷軍人は襟を正ふして傾聽し多大の感化ありしを見る同月八日濱野本行寺に講演開催鈴木中村兩師の法説ありて法雨を灑ぎたりと云ふ十九日七里法華根本靈場たる濱野本行寺にては例年の如く十九廿日報恩大法會を行へり青年布教隊員池澤高山三橋秋山鈴木山本山下の各師は終夜傳道に従ひ會

轉教の記

山本通辨

時は葉月暑さも未だ去りやらて蟬の聲さへ苦しげなる中の六日より四日間古屋方面に法輪を轉じて聊か吾が天分遂行の歴史を彩るを得た「十六日」中泉驛を發して午前十時名古屋市八百屋町妙行寺に着し午後一時講演を開いた住職武臺麟師は開會の辭を述べ次で予は日蓮上人の主義及人格に就て仰げば彌高く鐵れば彌堅くその一念の信は取て以て小日蓮たり得べきものなるを懇切叮嚀に諭し聽衆は爲に無限の感動に打たれたることを見うけた「十七日」午後一時同市常徳寺に開演此寺は有名な常樂院日經上人の弟子日壽上人の開基とあるから特に經師の猷身的弘通六條河原の法難等當時の慘劇より延て日蓮上人の奮闘活動主義を述べたので信徒の或者は感極まりしも、如く落涙して斯く由緒ある寺を是まで知らざりし恥かしさよと感謝

衆二萬を超ゆ教益尤も深かりしを認む廿日法要後浦祭なるもの濱野船手組合によりて舉行せられ池澤秋山鈴木山本の各師は熱心よく法を説き中村三橋高山山下吉塚の諸師は浦祭に出席しれりしが七年目に行はるゝ祭典なるが故中々に盛大なるものなり

廿五日同郡生實濱野在郷軍人主催にて追悼會を本行寺にて行へたり中村師導師として嚴肅なる音楽法要の式典を設け本宗より竹内萩原日暮小川井上齋藤山本吉塚の諸師眞言禪淨土本妙の各宗寺院住職も出席し聯隊長部長署長村長名譽職員の參拜あり餘興として大神樂相撲劍術柔術あり又甘酒其他の接待等もありて會するもの三千人盛會を極む

▲南泉法話會、山武郡今泉本泰寺に於て八月廿六日午前八時より午後五時迄開催會長田村卓二副會長内山源鈴木正二諸氏の熱心なる盡力により各部落の青年相會したりと云ふ

を表し名殘惜し氣に散會を告げた尙同寺には經師自筆の本尊及び袈裟六條河原の由來書並に尾州侯自筆の法華經等の靈寶があるのて不惜身命の當年も働はれて悲憤の情轉た禁ずる能はざるものがあつた滞在中熱田神宮や名古屋城等を巡覽し十九日岡本師と同行緒川越境寺に向ひ武藤師及信徒の出迎をうけ午後一時開演予は天月水月の譬喩を引いて多身散漫なる幾多の佛は遂に久遠本佛に歸趣統一せらるべきものなるを説き次で特命布教師國友日斌師は現代思潮と題して其缺陷を痛論し日蓮主義に依つて始めて救済し得べしと結び教益を布いた國友師は豊橋に予は名古屋常徳寺に法悦の夢を結びぬ二十日午後一時名古屋古渡町靈山寺に於て講演開催予は信念確立の要を説き四條金吾の例を擧げて逆境に處するも道念彌々堅固なるべきを説き確かに聽衆の琴線に觸るゝものあるを覺えた尙同寺に日經上人の血曼荼羅 び梵鐘等を藏し常

開會の辭

鈴木正二師 古口醇叙師 大森體勇師 篠崎安五郎君

聖日蓮の人生觀 成島泰行師 各講師の諄々能く説く所聽衆は感動に打たれたるが如し

▲通俗教育會、八月廿六日より三日間長生郡古所安住寺に於て片岡衛宮川光潔酒井眞隆氏發起にて開會廿六日午後三時三上義徹師は日蓮上人の識見に就て卓越せる國家觀を詳論すること二時間半に及び能く聽者をして諒解せしむ廿七日は暴風雨なりし爲休會し廿八日は酒井師の開會に次で 篠崎安五郎君 法に就て 成島泰行師

佛教概論 熱心なる講説あり宮川師閉會を告げ有志の懇和會ありて各自地方改善に對する意見を交換し更に來年度の夏期を利用して風教の改善を促がし青年の意氣を作興するに努むべしと云ふ

徳寺の寶物と思ひ合せて感興を深からしめた斯くて午後四時武師昌泰師等に見送られて熱田驛を發し見付町の自房に歸る寶前に拜跪して隨力弘通を奉告し終りた。

統一團翼費會費報告

(九月七日まで領收)

- 金參圓也 大正三、二人 勝屋勘之助殿
- 金一圓廿錢 同八、三、七 全先友太郎殿
- 金貳圓也 一時寄附 小池 辨碩殿
- 金壹圓也 大正二、七、八 豊田 良正殿
- 金壹圓也 同 池部 鐵吉殿
- 金參拾錢 同七、八、九 渡邊源次郎殿
- 金參拾錢 同 渡邊狀一郎殿
- 金參拾錢 同 渡邊 さん殿
- 金五十錢 同七、八 井内徳三郎殿

佛 教 と 修 養

本書は施本用として編纂したるもの。内容は本多大僧正の佛教の眞價。小原陸軍少將の軍人の精神と日蓮主義。三上本誌記者の日蓮主義と吾人の生活と題する意見を收む。客月來非常なる申込ありて現在僅かに千餘部を餘すのみ。希望の方は買切れざる内に申込ありたし。

▲八月十五日發行
▲一部郵税共金五錢
▲十部より百部迄郵税共一部三錢の割
▲百部より五百部迄郵税共一部二錢の割

勤 行 作 法

文學博士姉崎正治君
大僧正本多日生師編 (第四版發行)

●一部代金五錢十部以上一割引
●郵税四部毎に金二錢

聖 語 錄

研究者も布教家も共に座右に供ふべき聖典也。

●洋 裝 九 百 頁
●特製金一圓三十錢
●上製金八十五錢
●郵 税 金 八 錢

白 毫

雷電奔激天地爲に震ふ白毫の奮闘振は、實に現代思想界の霸王なりと世之を推す、自身また任重く沐浴潔者して眞の獅子吼をなす、もしまた敵營法王旗の動かされば鋭鋒肉薄し、遂に之を愛する白毫の武者振りを見よ。

天下の諸名士また肉を絞つて赤心血誠の同情を寄す、憂憤の志慨世の氣相迸發して、しかも修養訓に滿てる硬辯は、滔々懸河の如くにして奔激するを見よ。

所謂自然軟派はこゝに破れ、風雲月露の墨色は新天地の眞景を寫しえて、美文あり歌俳あり参考課あり、而して錦心鋪腸の才は宗教の體を具して雄篇傑作をなす、來つて清高の麗曲を見よ。

東京市牛込區早稻田鶴卷町三百六十一番地

事 務 所 一 佛 土 研 究 會

▲投稿歡迎▼ 掲出したる投稿者には本誌を無料進呈す

毎月一回五日發行
半ヶ年分金四十錢

郵 税 不 要

團 一 統

東 京 市 淺 草 區
北 清 島 町 十 四 番 地

(振替口座東京)
一 二 九

文學博士 三宅雄次郎君序 (再版)
大僧正 本多日生師著

法華經講義

洋裝全二冊貳千頁
正價 金四圓
特價 金參圓
內地郵税金貳拾錢
臺灣韓八百勿迄の小包料

目次

- ◎序說 ●第一章緒言 ●第二章法華超勝の教義 ●第三章諸種の法華經觀 ●第四章天台の法華經觀
- ◎第一節三種教相の綱格 ●第二節十變權實の巧釋 ●第三節六重大本迹の法華經觀 ●第四節三法々轉の
- ◎第二節待絕二妙の解釋 ●第六節一念三千の妙觀 ●第五節日蓮の法華經觀 ●第一節本化別頭
- ◎第三節但令用實の活斷 ●第七節應身常住の妙義 ●第四節佛界緣起の妙旨 ●第五節究竟
- ◎第四節圓善の活釋 ●第八節天台講經要道 ●第六節天台講經要義 ●第九節
- ◎第五節一貫の活論 ●第十節台常教相の異目 ●第七節法華經の科段 ●法華の壯觀 ●第六節天台講經要義 ●第九節
- ◎第六節五重玄義の妙解 ●第一節日蓮上人の學風 ●第二節本化獨特の五玄 ●第八節章妙法華傳
- ◎第七節日蓮講經の要義 ●第一節日蓮上人の學風 ●第二節本化獨特の五玄 ●第八節章妙法華傳
- ◎釋文 ●科段 ●來意 ●大意 ●釋題 ●文々解釋 ●通解 ●妙解 ●異解 ●批判 ●質議 ●解決 ●字義 ●
- ◎譯の概略 ●釋文 ●科段 ●來意 ●大意 ●釋題 ●文々解釋 ●通解 ●妙解 ●異解 ●批判 ●質議 ●解決 ●字義 ●
- ◎參考 ●讀唱

法華は天地法界の秘藏、世界群籍の帝王、亞細亞文明の中樞、佛教教觀の實歸にして、佛陀觀、宇宙觀、人身觀、教法觀、行法觀、その他教相教義の全般に亘りて之を調整し、發揮せるもの、苟も佛教の眞意を知らんと欲せば必ず法華經に來るべき也
古今東西の法華經觀を網羅し、特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義を闡明したる本書は實に佛教研究の上に現代及未來の光明たらん矣

發行所

東京淺草北清島町
振替東京一二一九

統一團

日蓮主義勸請文略解

大僧正 本多日生

實生活に理想を加へよ
三上義徹

如何にして日蓮主義を
發展せしむべきか
文學士 小林一郎

日蓮主義本尊論
井村日咸

維新の鴻業と日蓮主義
辯護士 吉田珍雄

△淺草公園夜行記 △刺客の心事と墓碑 △活動教史

統一

(第百二十二拾四號)

宗教と法律

法學博士 山田三郎